英語教育学研究

第　10　号

広島大学英語教育学会

２０２０

ま　え　が　き

新緑のまぶしい中、各地で梅雨入り宣言が発表される時期となりました。新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言により桜の季節を楽しむ余裕もなく、社会全体が大きな試練を経験した数ヶ月でした。ようやく全国各地の学校で授業が再開され始めていますが、大学などではまだまだオンライン授業が中心で、キャンパスに学生が戻るまでにはもうしばらく時間がかかりそうです。会員の皆様には、このような不安な時節の中、いかがお過ごしでしょうか。

本日ここに、『英語教育学研究』第 10 号をお届けいたします。研究論文においては、掲載論文の数は大変少数になりましたが、大変充実した研究を掲載できることになりました。編集委員会の川島浩勝先生、柳瀬陽介先生、山川健一先生、そして査読委員の先生方、また学会事務局の西原貴之先生をはじめ、多くの方々のご尽力で、本号が刊行できたことを喜びたいと思います。これまでのご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。本年度より、本誌は紙媒体からウェブ上での公開となりました。英語教育学研究における成果を会員各位と分かち合うとともに、新しい令和の時代に向けた研究のプラットホームとしての役割を果たす学術雑誌に成長することを期待したいと思います。

本学会は、2018 年末に広島大学英語教育学会と広島大学英語文化教育学会とが統合して、新たな研究組織である広島大学英語教育学会が誕生したのち、広島大学英語教育学会理論志向部門（代表　築道和明先生）としての活動を継続し、『英語教育学研究』の刊行に至りました。また、本学会のもう一つの活動団体である実践志向部門（代表　樫葉みつ子先生）においては、教英の卒業生各位からさまざまな優れた実践報告をいただいています。これら２つの組織が、理論研究と実践研究の両面から学会の活動を支えています。今年 4 月より、広島大学大学院教育学研究科は広島大学の研究科改組によって、新たに 4 専攻 14 プログラムで構成された大学院人間社会科学研究科の中の教育科学専攻の一部となります。名称は変わりますが、学会活動を通して広大の学燈を灯し続けて参りたいと思います。

今年度の学会は、例年より少し時期を早めて、7 月 19 日（日）に開催することを予定しておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大は今も完全に封じ込められたとは言えない状況です。緊急事態宣言が全面解除されたとはいえ、会員の皆様の安全、安心を最優先に考えた場合、計画通りに開催することにはいささかの不安が残ります。そこで先般，理事会で慎重にメール審議を行った結果、今年の研究会は中止せざるを得ないという決定に至りました。皆様と研究について語り合う機会がなくなることは大変残念ではございますが、このような決定に至ったことをご了承ください。

最後になりますが、本誌への投稿は、夏の学会時に発表されたものだけに限るものではありません。未発表の研究成果であれば幅広くご投稿を歓迎しておりますので、次号へも多くの会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

2020（令和 2）年 6 月

広島大学英語教育学会会長
深　澤　清　治

目　　次

まえがき　深　澤　清　治　i

【研究論考】
日本人英語学習者が産出する英語移動表現：
移動の「様態」に着目して　平　野　洋　平　1

学会彙報：2018（平成 30）年度～2019（令和 1）年度　21

広島大学英語教育学会の統合の経緯について　深　澤　清　治　25

編集後記　川　島　浩　勝　27

日本人英語学習者が産出する英語移動表現：移動の「様態」に着目して

平野洋平
神戸市立工業高等専門学校

キーワード：　動詞枠型言語、衛星枠型言語、様態、経路、移動様態動詞、有方向移動動詞

Abstract

Talmy (2000) divides languages into S(atellite)-framed languages and V(erb)-framed languages depending on what components of a Motion event such as Manner and Path have characteristically shown up in what syntactic constituents in a language. English belongs to S-framed languages, and Japanese V-framed languages. However, it remains unclear how such typological differences between the two languages influence the acquisition of each language. Especially, comparison of experimental results between productive aspects and receptive aspects of the acquisition has not been made so far. This study analyzed and characterized English expressions produced by 121 Japanese learners of English in terms of Manner of motion. As a result, Manner was mostly expressed in a manner-of-motion verb. In conclusion, the results of this study suggest that L1 may influence differently productive aspects and receptive aspects of the acquisition of English motion expressions by Japanese learners of English.

1.　はじめに

1.1. 背景と目的

日本の英語教育では、コミュニケーション能力を重視する指導や学習への転換が叫ばれ、英文法の指導や学習がまるで弊害であるかのように論じられることが少なくない。確かに、これまでの英文法指導の在り方は、指導者によって「語られる文法」に重きが置かれる割合が強く、学習者によって「体現される文法」に焦点を当てることが十分と言えるものではなかったかもしれない。この「語られる文法」とは、ある特定の言語の使用について総合的に説明した言語（＝メタ言語）のことを指し、「体現される文法」とは、ある特定の言語（例えば英語）の使用者が、その言語を使用しているという事実において自然に示している文法のことを指す（柳瀬, 2012）[1]。しかしながら、そのような中、改めて学習英文法の見直しが図られ、その重要性が再評価されつつある（加賀・大橋, 2017、中島, 2017、大津, 2012）。英文法の指導について、指導要領では「語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること」と定められている。日本語と英語（日英語）の語順や修飾関係などの違いに配慮することは、日本語を母語とする英語学習者（Japanese learners of English: JLE）が英語学習を進める上で、避けて通れるものではない。(1) に示すように、英語は各句の主要部（動詞句なら動詞、名詞句なら名詞のように、各句の中心的な要素）が各句の先頭に位置する「主要部先頭言語」(head-initial language)であるのに対して、日本語は主要部が各句の末尾に位置する「主要部終端

言語」(head-final language) 言語である（牛江, 2002）。このような点を踏まえても、学習者は学習の初期段階から日英語間の構造上の違いを目の当たりにすることになると言える。

(1)

	英語	日本語
a. V:	study linguistics	言語学を学ぶ
b. N:	student of linguistics	言語学の学生
c. A:	afraid of dogs	イヌが怖い
d. P:	from Boston	ボストンから

（牛江, 2002: 113［下線筆者］）

また、このような構造上の違いに加えて、同じことを表現する場合でも、日英語間で用いられやすい品詞が異なる点に配慮することの重要性も指摘されてきた。例えば、江川 (1991) は、(2) に示すような文を取り上げ、日本語が動詞や形容詞を中心にものごとを表現しやすい言語であるのに対して、英語は名詞を中心にものごとを表現しやすい言語であるという点に注意を払いながら学習を進めることを推奨している。

(2) a. あなたが早くよくなるように願っています。
We are hoping for your quick **recovery**.
Cf. We are hoping that *you will recover quickly*.
b. この詩人は自然を深く愛することで広く知られています。
This poet is widely known for his deep **love** of nature.
Cf. This poet is widely known because *he loves nature deeply*.
c. ジェーンがパーティーを欠席したので、ベンはがっかりした。
Ben was disappointed at Jane's **absence** from the party.
Cf. Ben was disappointed to find that *Jane was absent from the party*. （江川, 1991: 30-36）

ただし、上記の Cf. にあるとおり、英語でも動詞や形容詞を用いた表現が可能であるし、(2a) の日本語を「あなたの早い回復を願っている」と表現することもできるように、日本語でも名詞的な表現ができる場合がある。つまり、このような日英語間の違いは、文法上の規則としての違いというよりも、それぞれの言語が持つ特性や傾向の違いという方が適切であるように思われる。こうした特性や傾向の違いは、明示的な指導を施さなければ学習者には気づきが得られにくい点であると言えるかもしれない。また、そうした指導を基に学習を進めることで、文法的に正確な英語が身につくだけでなく、より英語らしい英語表現を習得することにつながる可能性が高まるかもしれない。江川 (1991) による上記の指摘は、江川自身も述べているとおり、日本人英語学習者（高校生レベル）にとって、非常に有益なものであると言えよう。しかし、これはある程度学習を進めた上でなければ注意を払うことが難しいものであると思われるし、同時に、ある程度学習を進めた上で注意を払うからこそ、その後の学習がより効果的に進められるようになるものであるようにも思われる。それでは、もっと早い学習段階からでも学習者が十分に注意を払うことのできる日英語間の特性や傾向の違いは何かないものだろうか。

効果的に英語の指導や学習を進めるために、理論言語学や第二言語習得研究の知見を日本の英語教育に活用することが改めて積極的に論じられている（藤田・松本・児玉・谷口, 2012、廣森, 2015、

白畑, 2015、鈴木, 2017）。その内、初学者でも注意を払うことができる 1 つの例として、日英語間の「言語類型論」上の特性の違いを英語教育に取り入れることが提案されている（小野, 2012）。ここでいう言語類型論とは、Talmy (2000) によって提唱されているものである。この類型論に基づけば、次の 1.2. で概観するとおり、どのような認知的な概念がどのような品詞で表現されやすいかによって、言語が 2 種類に大別され、日本語と英語は異なる種類に分類される。つまり、日本語と英語とでは、同じ品詞（例えば動詞）であってもそれによって表現されやすい概念が異なりうるということになる。この違いにより、英語には日本語に直接置き換えること（以下、直訳）ができない表現が含まれるだけでなく、日本語を英語に直訳しても不自然な表現になることがある。日本の英語教育において、学習者が母語である日本語を拠り所としながら学習を進める場合がほとんどであると考えて差し支えないであろう。そのような中、冒頭で触れた日英語間の構造上の違いや用いられやすい品詞の違いに加え、同じ品詞でも表現されやすい概念が異なるというこのような違いに意識を向けた学習を学習段階の早い時期から取り入れることがより効果的な学習につながるかも知れない。

この類型論上の言語特性は、移動を表す出来事（以下、移動事象）を描写する表現を中心にその特徴が詳らかにされてきた [2]。英語の移動表現は中学校レベルで教えられる語彙と構造からなるものも多いため、こうした日英語間の言語特性の違いは、学習段階の早い学習者にも意識を向けさせることのできるものであると思われる。本稿では、日英語間のこの類型論上の特性の差異が、JLE が英語の移動表現を産出する際に、どのような影響を与えるかを検証する。また、JLE を対象に英語移動表現の容認面の習得を取り扱った先行研究で報告されている結果と比較することで、類型論上の特性の差異が産出面に及ぼす影響と容認面に及ぼす影響の違いを明らかにすることを目的とする。さらには、それらの結果に基づきながら、学習者がより英語らしい表現を身に着ける上で効果的であると思われる指導法・学習法を提案することも目的とする。

1.2. 日英語間の移動表現の違い

Talmy (2000) は、移動事象を構成する概念として「移動物 (Figure)」、「場所 (Ground)」、「移動 (Motion)」、「経路 (Path)」、「様態 (Manner)」、「原因 (Cause)」などを認め、その内、移動事象の中心概念である「経路」が、動詞で表現されるか動詞以外の要素で表現されるか次第で、言語が「動詞枠型言語」と「衛星枠型言語」に分類されるとする。これらの言語類型論上の特性の差異は以下のようにまとめられる。

(3) a. 動詞枠型言語（⊇日本語）
移動事象では、手段・方法・原因・様態が動詞以外の要素に表現され、着点や経路はそれらを含意する移動動詞によって表現される。
b. 衛星枠型言語（⊇英語）
移動事象では、手段・方法・原因・様態が動詞に表現され、着点や経路は動詞以外の要素（＝衛星）に表現される。 （小野, 2012: 333［一部修正］）

ここでは日英語の移動表現の特徴を整理し、日本語が動詞枠型言語、英語が衛星枠型言語に分類されることを、用語の定義と併せて確認していく。次の英文と和文を対比しながら見てみよう。

(4) a. Tom came/went to the station. （「方向＋着点句」型）

b. トムは 駅に 来た／行った。

(5) a. Tom ran to the park. （「様態＋着点句」型）

b. *トムは 公園に 走った。

c. トムは 公園に 走って 来た／行った。

まず、英文に着目しよう。(4a) と (5a) はいずれも移動を表す英文であるが、双方の主動詞に着目すると、(4a) では Tom がどのように移動したか（以下、移動の「様態」）が示されていないのに対して、(5a) では「走る」という行為によって移動したことが示されていることが分かる。以下では、come／来る や go／行く などの移動の様態を含意しない動詞を「有方向移動動詞 (directed motion verb)」と呼び、walk／歩く や run／走る などの移動の様態を表す動詞を「移動様態動詞 (manner-of-motion verb)」と呼ぶ（上野・影山, 2001）。また、(4a) のような英文を「方向＋着点句」型の移動表現、(5a) のような英文を「様態＋着点句」型の移動表現と呼ぶ [3]。

次に、和文を確認しよう。(4b) と (5b) を見ると、(4a) が日本語に直訳できるのに対し、(5a) が直訳できないことが分かる。(5a) のような「様態＋着点句」型の英語表現を自然な日本語に置き換えようとすると、(5c) の「走って来た／行った」のように、移動様態動詞と併せて有方向移動動詞を用いる必要がある [4]。このように、様態を含む移動表現において、英語では着点句のみで到着点までの「経路」を表現できるのに対し、日本語では有方向移動動詞を用いなければ、到着点に達したことを表せない。つまり、日本語は到着点までの「経路」を動詞によって表現していることになる。このような日英語の違いから、日本語が「動詞枠型言語」、英語が「衛星枠型言語」に分類される。なお、(5c) の「走って来た／行った」のような日本語表現を直接英語に置き換えた (6a, b) のような表現を位置変化の「迂言的表現」(periphrastic expression) と呼ぶことにする。(6a) は移動様態動詞と有方向移動動詞を and で並列させた表現であり、(6b) は主動詞に有方向移動動詞を用い、移動の様態を文末の by -ing で表現したものである。以下では、(6a) のような英文を「and 型」の迂言的表現、(6b) のような英文を「by 型」の迂言的表現と呼ぶ。

(6) 迂言的表現

a. Tom ran and came/went to the park. （and 型）

b. Tom came/went to the park by running. （by 型）

このような迂言的表現は、後述するとおり、JLE を対象とした英語移動表現の習得（容認面）研究において、実験のテスト文として含められてきた。次のセクションでは、そのような容認面に焦点を当てた習得研究を概観し、その結果が産出面に焦点を当てた習得研究で報告されている結果と対照的である点を確認した上で、本稿の研究課題を提示する。

2. 先行研究

このセクションでは、JLE を対象にして英語の移動表現の習得を取り扱った先行研究を概観する。まず、容認面に焦点を当てた先行研究として Inagaki (2001)、平野 (2017) を取り上げる。ここでは、Inagaki (2001) における検証方法上の限界点に言及し、平野 (2017) がそれを克服していることを確認する。また、これら 2 つの研究で得られた結果には共通点があることを指摘する。その後で、産出面に焦点を当てた先行研究として Spring (2010)、スプリング・堀江 (2011)、Spring & Horie (2013) を

取り上げる。ここでは、これら一連の研究における検証結果を踏まえ、実験参加者が産出した英文の特徴を整理する。

2.1. 容認面を取り扱った先行研究

2.1.1. Inagaki (2001)

Inagaki (2001) は、JLE が「様態＋着点句」型の英語移動表現や迂言的表現をどの程度自然な表現として容認するかについて検証を試みている [5]。JLE の実験参加者は、工学専攻の大学 1 年生 42 名であった。参加者の英語のレベルについては、中学校や学習塾で英語学習を開始していることや、1 カ月以上英語圏への滞在経験がある者がいないことから、中級程度（Intermediate）と考えられるとしている。検証方法として、「イラスト付き容認性判断タスク」が採用されている。このタスクでは、実験参加者は、移動行為を示した 1 枚のイラストと複数のテスト文が同時に提示される。イラストには、ある場所への移動（例：男の子が家に走って入ろうとしている状況）や、ある場所での行為（例：男の子が家の中で走っている状況）が示されている。そのイラストが示す状況を描写する英文として、イラストと併せて提示されたテスト文がどの程度自然な表現であると感じるかを 5 件法で回答するよう求められている。5 件法の回答項目は、 両極の -2 と 2 がそれぞれ “completely unnatural” と “completely natural” とされており、真ん中の 0 が “not sure” とされている。

この実験の結果から、Inagaki (2001) は、JLE が「様態＋着点句」型の移動表現（例：Sam walked into the house.）をある程度容認する一方で、and 型や by 型の迂言的表現（例：Sam walked and went into the house. / Sam went into the house by walking.）をそれと同程度に（過剰に）容認することを報告している。また、その原因として、JLE が迂言的表現中の “and” や “by” を日本語の「～（し）て」形表現に相当するものとみなしている可能性を指摘している（例： 歩い「て」入った、走っ「て」来たなど）。

この実験には、「比較選択の問題」と「双極法の問題」という克服すべき限界点が存在している。比較選択の問題とは、同時に提示された複数の判断対象に優劣をつけてしまうことにより、1 つ 1 つの判断対象が適切に判断されていない可能性があることをいう。この実験では、1 枚のイラストに対して複数のテスト文が同時に提示されている。これにより、実験参加者は提示されたテスト文同士で優劣をつけながら容認性判断をしてしまい、1 つ 1 つのテスト文に対する適切な判断がなされていない可能性が残る。例えば、1 つ 1 つのテスト文を個別に見た場合には同じ判断をするものであっても、それらが同時に提示されることによってそれらを比較してしまい、判断に優劣をつけてしまうというようなことが考えられる。

次に、双極法の問題について指摘する。双極法とは、上述の 5 件法のように、実験参加者に提示する回答に正の数と負の数の両方が含まれているものをいう。双極法には 2 つの限界点が考えられる。1 つ目の限界点は、真ん中の 0 が意味するものが曖昧な点である。Inagaki (2001) の実験では “not sure” となっている。この回答については、実験参加者がテスト文に対して感じる自然さが中間くらいのものと判断した場合と、どの程度の自然さであるかの判断そのものに迷った場合との回答が混在している可能性が考えられる。2 つ目の限界点は、正の数側の項目と負の数側の項目に、実質的に同じ意味を表すものが含まれていると考えられる点である。Inagaki (2001) における 5 件法の回答の内、-1 と 1 は実質的に同じ意味を表すことになりうる。これら 2 つの回答については項目名の記載がなされていないが、仮にこれら 2 つの回答の項目名を -1 “somewhat unnatural「ある程度不自然」” と 1 “somewhat natural「ある程度自然」” としたならば、ある程度自然であるということはある程度不自

然でもあり、ある程度不自然であるということはある程度自然でもある、という具合に意味的な重複が生じてしまうことになる。

2.1.2. 平野 (2017)

平野 (2017) は、JLE を対象に、「様態＋着点句」型、迂言的表現、「様態＋場所句」型の英語移動表現に対する容認性を検証した [6]。検証方法として、次頁に示す図 1・図 2 のようなイラストを用いて、英文容認性判断タスクが採用されている。JLE の実験参加者は 46 名で、その内 26 名が英語教育専攻の大学 1 年生であり、20 名が総合政策専攻の 2〜4 年生であった。前者の 26 名の英語のレベルは TOEIC で平均が 644.6 点、標準偏差が 69.0 であった。後者の 20 名については、TOEIC を受験したことがある者が 20 名中 11 名であり、その平均が 499.3 点、標準偏差が 135.9 であった。残りの 9 名については実験実施時期の英語のレベルを測る材料はなかった。

この実験では、2 枚 1 組のイラストに対してテスト文 1 文のみが提示される。ただし、同じ状況を描写した様々な英文に対する容認度を比較できるように、1 組のイラストと英文の組み合わせは複数通り用意されていた。例えば、図 1 のイラストに対して、“Tom ran into the park.” という英文が同時に提示されることもあれば、“Tom ran and went into the park.” や “Tom went into the park by running.” といった英文が同時に提示されることもあった。つまり、参加者は実験中に同じイラストを何度か目にするが、その都度異なる英文に対する容認度を判断することを求められたことになる。また、提示するイラストの順序はランダムにしてあった。さらに、回答に負の数の項目を設けない単極法の 5 件法（(0) 完全に不自然、(1) 少し自然、(2) わりと自然、(3) かなり自然、(4) 完全に自然）が採用されている。さらに、2 つの回答項目（(X) 知らない単語があるため判断できない、(Y) 知らない単語はないが判断できない）を設けることで、判断に迷った場合の回答が 5 件法の中に含まれないようにされている。こうした修正により、上述の「比較選択の問題」と「双極法の問題」が克服されている。

この実験の結果をまとめたものが次頁の図 3 である。図 3 中の A が英語専攻の 26 名、B が総合政策専攻の 20 名の結果を表したものである。図 3 中の (1) 様態＋着点句、(3a) 迂言的表現 and 型、(3b) 迂言的表現 by -ing-型に注目されたい。平野 (2017) は、Inagaki (2001) と同様に、JLE が「様態＋着点句」型の移動表現をある程度容認する一方で、and 型や by 型の迂言的表現をそれと同程度に（過剰に）容認することを報告している。

ここまで概観してきた一連の先行研究から、JLE による英語移動表現の容認面の習得について、以下のように整理することができる。

・JLE は「様態＋着点句」型の英語移動表現をある程度容認する。
・JLE は「迂言的表現」を過剰に容認する。

ここまでは容認面の習得を取り扱った先行研究を概観してきた。果たして JLE は、英語の移動表現を産出しようとする際に、「様態」をどのように表現するであろうか。「様態＋着点句」型をある程度容認するように、様態動詞を用いて表現するであろうか。あるいは、「迂言的表現」を過剰に容認するように、動詞句を 2 つに分けたり、様態を副詞的に表現したりするのだろうか。次の 2.2. では、JLE を対象に英語移動表現の産出面の習得を取り扱った先行研究として、Spring (2010)、スプリング・堀江 (2011)、Spring & Horie (2013) を概観する。

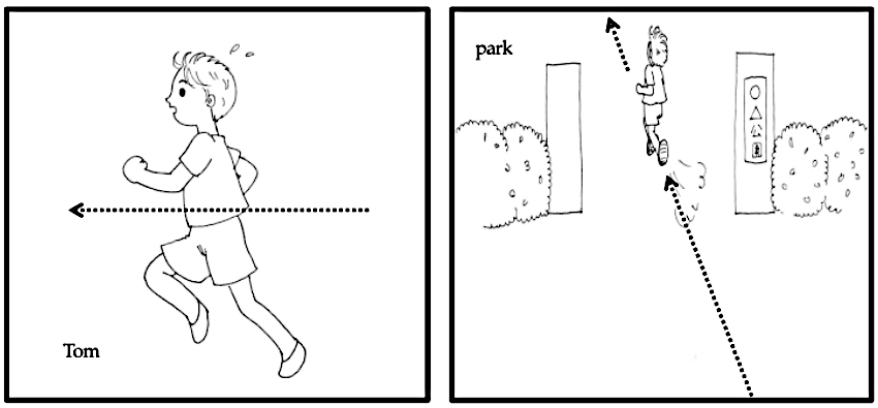

図 1　平野 (2017) における実験イラストの一例［着点読み］（平野, 2017, p. 48）

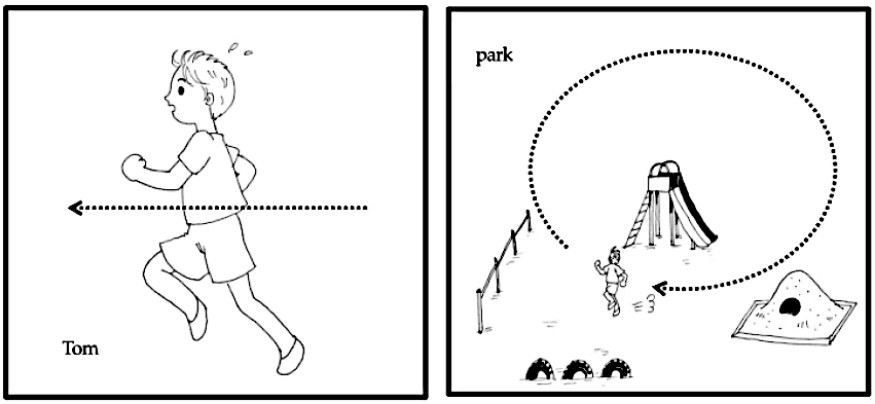

図 2　平野 (2017) における実験イラストの一例［場所読み］（平野, 2017, p. 48）

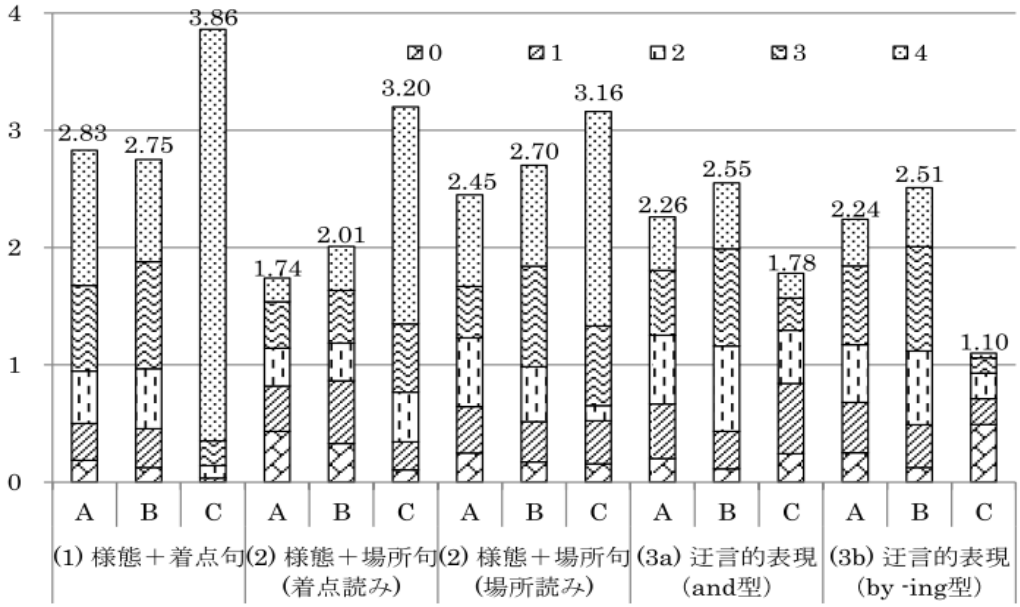

図 3　平野 (2017) における容認性判断タスクの結果（平野, 2017, p. 49［一部改変］）

2.2. 産出面を取り扱った先行研究：Spring (2010)、スプリング・堀江 (2011)、Spring & Horie (2013)

Spring (2010)、スプリング・堀江 (2011)、Spring & Horie (2013) の一連の研究では、日本語を母語とする英語学習者だけでなく、中国語を母語とする英語学習者も実験参加者に含め、学習者が産出する移動表現に見られる特徴を分析している。ここでは日本語を母語とする英語学習者（JLE）のみに焦点を当てて議論を進める。その上で、JLE が産出した英文の特徴を整理する。

これら一連の研究では、アメリカの大学に在学中の日本語母語話者英語学習者 18 名と中国語母語話者英語学習者 21 名を対象に、これらの実験参加者が産出された英語移動表現に見られる特徴を分析している。具体的には、移動の様態がどのように表現されるかという点に着目し、実験参加者の英語力と英語圏滞在期間の観点から、検証が試みられている。実験参加者は、TOEFL のスコアが 510 点以上であるか 510 点未満であるかによって、上級レベルと中級レベルに分けられている。日本語母語話者については、上級レベル 11 名（平均 549.1 点、標準偏差 36.6）、中級レベル 7 名（平均 471.3 点、標準偏差 48.0）であった。中国語母語話者については、上級レベル 8 名（平均 541.0 点、標準偏差 18.3）、中級レベル 13 名（平均 482.0 点、標準偏差 23.6）であった。また、アメリカでの滞在期間が 1 年を上回るか 1 年以下かによって、長期滞在者と短期滞在者とに分けられている。日本語母語話者については、長期滞在者 12 名（平均 4.2 年、標準偏差 2.5）、短期滞在者 6 名（平均 0.5 年、標準偏差 0.1）であった。中国語母語話者については、長期滞在者 10 名（平均 4.6 年、標準偏差 2.9）、短期滞在者 11 名（平均 0.8 年、標準偏差 0.3）であった。

検証方法としては、動画を用いた状況描写タスクが採用されている。この実験では、実験参加者は短い動画（7～31 秒）15 個を見た上で、1 つ 1 つの動画が表している出来事を 1 文で説明することが求められている。15 個の動画の内、7 個の動画が移動を表す分析の対象であった。この実験結果から、Spring & Horie (2013) では、英語力よりも英語圏滞在期間の方が、移動の様態を移動様態動詞で表しやすいという英語の特性を習得することに影響を及ぼしやすいという報告がなされている。英語圏滞在期間中のどのような側面が学習者の習得に影響を与えているかは定かではないが、少なくとも、JLE が総じて移動の様態を表現しない傾向が強いことは明らかなものと思われる。これは、2.1. で JLE が「様態＋着点句」型の移動表現や迂言的表現に対してある一定の容認度を示したことを踏まえると、容認面の習得研究の結果とは対照的なものであると言える。

ただし、この Spring & Horie (2013) 実験結果は、JLE が移動の様態を表現「できない」傾向が強いということを必ずしも含意するものではない。つまり、この結果からは、JLE が様態を表現することに抵抗や困難を感じているのか、それとも、様態を表現「しない」傾向があるだけなのかが明白であるとは言えない。JLE は、英語の移動表現を「様態」を含めて産出しようとする場合に、どのように表現するであろうか。産出に困難を要するのだろうか。あるいは、何かしらの誤りを犯してしまいやすいのだろうか。本研究では、ここまでの議論を踏まえ、以下の研究課題 (research question: RQ) に取り組む。

［RQ 1］JLE は、着点読みの解釈を伴う移動事象を移動の「様態」を含めて英語で描写する場合、様態動詞のみを主動詞として用いることで、「様態」を表現するか。

［RQ 2］JLE は、着点読みの解釈を伴う移動事象を移動の「様態」を含めて英語で描写する場合、迂言的表現（に似た英文）を用いることで、「様態」を表現するか。

3. 検証と考察

3.1. 検証実験

3.1.1. 実験対象者と実験材料

本研究の検証実験の参加者は、工業高等専門学校に在籍する 1 年生 121 名であった。その内、機械工学を専攻とする学生が 80 名（2 クラス）、電気工学を専攻とする学生が 41 名（1 クラス）であった。実験実施時の参加者の英語のレベルを測る外部資格試験のスコアのような材料はなかったが、参加者が工業高等専門学校入学時に受験した学校独自に実施した 100 点満点の実力試験の結果（平均 82.1 点、標準偏差 9.1）を基に、クラスごとの得点を対応なしの 1 元配置分散分析で比較したところ、結果は $F(2, 119)=1.38, \eta^2=.022, p=.255$ となり、クラス間の有意差は認められなかった。参加者の中には、幼少期に 2 年間アメリカで過ごした学生が 1 名いた。また、中学時に 1 週間程度オーストラリアへの短期留学の経験を持つ学生がいた。その他の学生は英語圏への滞在経験はなかった。

実験方法には、イラストを用いた「状況描写タスク」を採用した。このタスクでは、上で見た図 1・図 2 や以下に示す図 4・図 5 のような 2 枚 1 組のイラストを使用した。イラストには、図 1 や図 4 のようにある場所への移動（着点読み）を描写したものと、図 2 や図 5 のようにある場所での行為（場所読み）を描写したものをそれぞれ 10 組ずつ（計 20 組）含めた。

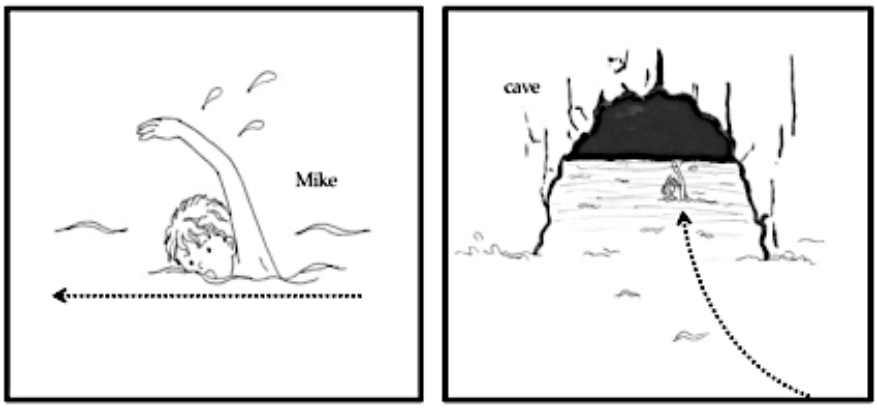

図 4　本研究の実験に用いたイラストの一例［着点読み］（平野, 2018, p. 70）

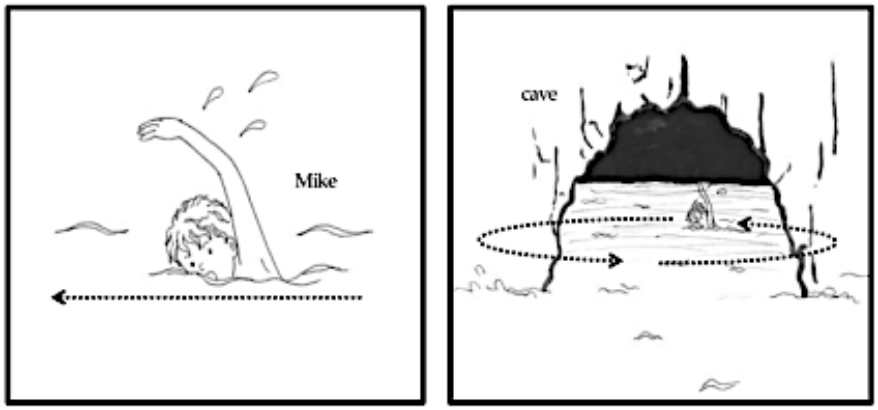

図 5　本研究の実験に用いたイラストの一例［場所読み］（平野, 2018, p. 70）

3.1.2.　実験手順と分析対象

このタスクでは、まず 2 枚 1 組のイラストを参加者に提示し、各組のイラストが一連の出来事を描写するものとして捉えてもらった。その上で、その状況を英文 1 文で書き表してもらった。英文を回答するにあたり、イラストの人・物が「どこへ」「どのように」移動しているか、あるいは、「どこで」「どのような」行為をしているかを表現するように努めてもらった。なお、英文の主語が左側のイラストに描かれている人・物になるように、予め回答の書き出しを指定しておいた。また、1 組のイラストにつき回答欄を 3 つ用意し、複数の回答が思いつく場合には、それらを全て記入してもらい、その中で最も自然な英語表現だと思うものに〇印をつけてもらった。ただし、1 組のイラストに対して複数の回答を考えることよりも、全てのイラストに対する回答を一通り済ませることを優先してもらった。さらに、英文の回答欄とは別に 2 つの選択肢 (X) と (Y) を用意し、「イラストが表している状況が分からない」場合には (X) を、「英単語・英語表現が思いつかない」場合には (Y) を選んでもらった。(Y) を選んだ場合には、書きたかったが書けなかった英単語・英語表現の意味を日本語で答えてもらった。実験はクラスごと実施した。いずれのクラスも 30 分程度で全ての回答を終えた。また、どの参加者もすべての回答を終えるまで真摯に取り組んでくれた。

本研究では、全 20 組のイラストの内、「着点読み」の状況を描写する 10 組のイラストに対して産出された英文を分析の対象とした。これら 10 組のイラストに対する回答の内、1,010 の英文を有効な回答とした。“Fred was _____.” のように文が途中で途切れているものや、“The bird flew _____ the tree.” のように文の途中に空所があるものは、有効な回答には含めなかった。なお、選択肢 (X) の回答数が 43、選択肢 (Y) の回答数が 209 であった。また、無回答のものが 19 含まれていた。以下では、有効回答 1,010 の英文において、移動の「様態」がどのように表現されたかということに着目しながら議論を進める。また、産出された英文だけでなく、選択肢 (Y) を選んだ参加者がどのような表現を産出できなかったのかについても着目して議論を進める。

3.2. 実験結果と考察

まず、着点読みの状況を描写するイラストに対して産出された有効回答 1,010 の英文において、移動の「様態」がどのように表現されているかに着目し、3 つのタイプに分類した。1 つ目は、様態が主動詞のみで表現されている（つまり主動詞が「移動様態動詞」のみの）英文である。2 つ目は、「様態」が表現されていない英文である。そして 3 つ目は「様態」が表現されているものの、単一の主動詞（移動様態動詞）のみで表現されているわけではない英文である。以下に、その割合を図 6 として示す。また、各タイプの回答例を表 1・表 2 に示す。図内・表内では、上記 3 つのタイプを、それぞれ A［様態動詞のみ］、B［様態表現なし］、C［様態表現＋α］として示す[7]。表内の英文において、様態動詞には下線を付け、有方向移動動詞は太字にしている[8]。また、C タイプについては、and 型と by 型を合わせて C-(1) タイプとし、それ以外の表現を C-(2) タイプとして示す。各タイプの回答数（回答率）は、A が 862 (85.3%)、B が 87 (8.6%)、C が 61 (6.0%) であった[9]。以下、RQ 1 と RQ2 についてそれぞれ検証し、考察を加えていく。

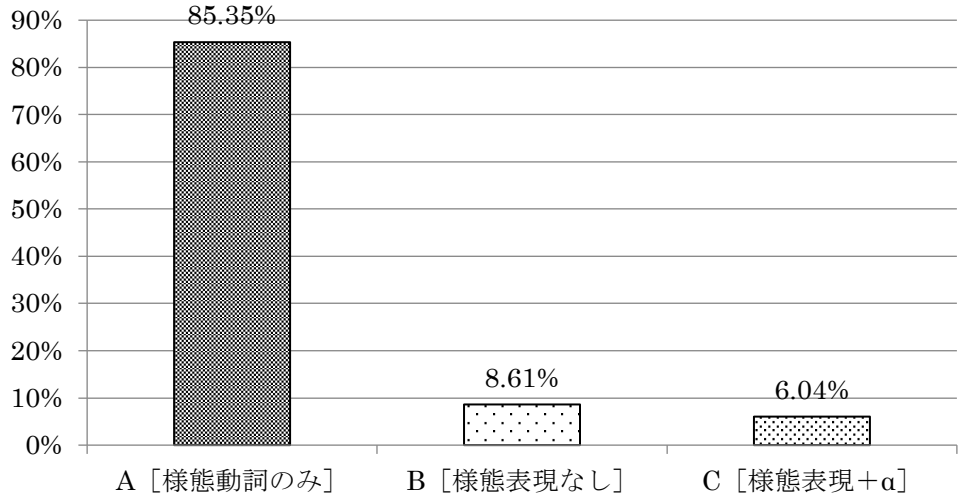

図 6　移動様態の表現のされ方の占める割合

表 1　産出された英文の例（A タイプと B タイプ）

A［様態動詞のみ］タイプ	B［様態表現なし］タイプ
(1) The bird flew over the tree.	(1) The bird **backed** to the tree.
(2) The bird flew to the house.	(2) The bird **came** to the house.
(3) Tom ran to the park.	(3) Tom **passed** the park's gate.
(4) Ken ran into the field.	(4) Ken **came** into the field.
(5) Bob walked on the stage.	(5) Bob **climb** (on) the stage.
(6) Jim walked around the house.	(6) Bob **ride** on the stage.
(7) Tim swam under the bridge.	(7) Jim **turned** right at the house.
(8) Mike swam into the cave.	(8) Mike **went** to the cave.
(9) John jumped onto bed.	(9) John **arrived** at the bed.
(10) Fred jumped into the pool.	(10) Fred **entered** (in) the pool.

表 2　産出された英文の例（C タイプ）

C-(1) and 型　by 型	C-(2) その他
(1) Bob walked and **got** to the stage.	［分詞］
(2) Ken ran and **entered** the field.	(1) Bob **entered** walking on the stage.
(3) Mike swam and **enter** the cave.	(2) Mike **entered** swimming in the cave at the sea.
(4) Tom was running and **going** to the park.	(3) Ken **entered** running in the field.
(5) Ken **entered** (in) the field by running.	［不定詞-(a)］
(6) Mike **entered** the cave by swim.	(4) Ken **went** to field to run.
(7) Tom **entered** in the park by running.	(5) The bird **came** to fly near the house.
(8) Tom **went** to park by run(ning).	(6) Mike **went** to cave to swim in the sea.
(9) Tim **passed** through under the bridge by swimming.	［不定詞-(b)］
(10) The bird **goes** to house by flying.	(7) Mike swam to **come** into the cave.
	(8) The bird flew to **go** to the house.

3.2.1.　RQ1 の検証と考察

まず、RQ1「JLE は、着点読みの解釈を伴う移動事象を移動の『様態』を含めて英語で描写する場合、様態動詞のみを主動詞として用いることで、『様態』を表現するか。」については、A タイプ

の回答が 85.3%の割合を占めたことから、肯定的な結果が得られたと言えるだろう。以下、この結果を、2.2. で示した Spring & Horie (2013) の結果と比較しながら考察を加えていく。Spring & Horie (2013) では、JLE が全体的に様態を表現しない傾向が強いことが報告されていた。この結果と比べると、本研究の結果は対照的なものに見えるかもしれない。ここで留意すべき点は、Spring & Horie (2013) の検証実験では、参加者に情景を描写する英文を自由に産出することが求められていたのに対して、本研究の実験では、「様態」という言葉は用いていないものの、参加者に「どのように」移動をしているのか、また、「どのような」行為をしているのかを表現することが求められていたことである。これにより、JLE は移動の様態を産出「しない」傾向が見られるものの、様態を産出することに「困難を感じている」可能性はそれほど大きくはないものと考える。

この点は、実験参加者の英語力の違いを考慮しても支持されるように思われる。Spring & Horie (2013) の JLE の実験参加者が、アメリカの大学に在学中の英語学習者であったのに対し、本研究の実験参加者が日本の高等専門学校に在学中（当時 1 年生）の英語学習者であったことを思い出されたい。残念ながら、これら 2 つの研究における実験参加者の英語力を統一的に比較する指標は持ち合わせていないが、こうした実験参加者の背景情報から、Spring & Horie (2013) における実験参加者の英語力が本研究の実験参加者を上回っていることは十分に期待できるものと思われる。その点を踏まえると、Spring & Horie (2013) の実験参加者が、様態動詞を用いて移動の様態を表現することに対して、本研究の実験参加者以上に困難を要していたとは考えにくい。このことから、JLE は自由に英文を産出する際に、様態を表現するだけの英語力を持ち合わせていても、移動表現の中に様態を表現しない傾向があるという可能性が示唆されるものと考える。

3.2.2. RQ2 の検証と考察

次に、RQ2「JLE は、着点読みの解釈を伴う移動事象を移動の『様態』を含めて英語で描写する場合、迂言的表現（に似た英文）を用いることで、『様態』を表現するか。」について検証していく。C タイプの回答が 6.0%の割合しか占めなかったことから、RQ2 については、否定的な結果が得られたと言えるだろう。以下、この結果を 2.1.1. で示した Inagaki (2001) の結果と比較しながら考察を加えていく。Inagaki (2001) では、JLE が「様態＋着点句」型の英語表現をある程度容認する一方で、and 型や by 型の迂言的表現をそれと同程度に（過剰に）容認することが報告されていた。本研究においても、迂言的表現に相当する英文が産出されたものの、その回答数（回答率）は極めて少な（低）かった。本研究では、1 つの情景を描写する英語表現を複数思いつく場合には、それらをすべて回答してもらうように求めた。よって、「様態＋着点句」型（≒A タイプ）の英文を産出したとしても、さらに迂言的表現に相当するような英文を産出する可能性は十分に期待できた。また、迂言的表現に相当する表現を先に産出する可能性も十分に期待できた。それにもかかわらず、迂言的表現に相当するような英文はわずかにしか産出されなかった。このことから、母語（日本語）が英語移動表現の習得に与える影響は、容認面と産出面との間に大きな違いがある可能性が示唆されたものと考える。つまり、仮に Inagaki (2001) が指摘するように、JLE が迂言的表現を過剰に容認してしまう原因の 1 つが、迂言的表現内の “and” や “by” を日本語の「～（し）て」表現に相当するものとみなしていることによるものだとすれば、その影響は産出面においては著しく小さいものであると言えよう。これは、Spring & Horie (2013) において、JLE が句や節を分けることによって様態を表そうとしている割合が低いことが報告されている点からも指摘できるものと思われる。

3.2.3.　C タイプならびに (Y) に見られる母語の影響

様態に関わる議論の最後に、産出された C タイプの英語表現について、(Y) と回答された際に JLE が産出できなかった英語表現と併せて、より詳細に眺めていく。まず、C タイプの回答から見ていこう。再度、表 2 を見られたい。 表 2 左側の C-(1) タイプの英文は、and 型、by 型の迂言的表現であった。このタイプの英文が産出された原因として、繰り返しになるが、JLE が “and” や “by” を日本語の「～（し）て」形表現に相当するものとみなしていることが考えられる。それでは、表 2 右側の C-(2) タイプのように、“and” や “by” が用いられていない英文が産出された原因としてはどのようなことが考えられるであろうか。ここで、C-(1) タイプと C-(2) タイプの双方で、移動様態動詞（下線部）に加え、有方向移動動詞（太字部）が用いられていることに着目したい。1.2. で整理したように、日本語の移動表現（着点読み）では、移動の様態を含めて表現する場合にも有方向移動動詞が必要となる。その際、「～（し）て」形表現が用いられることになるわけだが、JLE の中には、英語で様態を含む移動表現を産出しようとする際に、この「～（し）て」形表現に相当する英語表現を含めることよりも、有方向移動動詞を含めて表現しようとすることに強く意識が働く者がいるのかもしれない。実際に、C-(2) に示したとおり、分詞や不定詞を用いて移動様態動詞と有方向移動動詞の双方を含めた英文が産出された [10]。この分詞型の英文については、2.1.1. で言及した Inagaki (2001) において、JLE が自然な表現として容認しにくいことが報告されている。また、この分詞型の英文よりも by 型の迂言的表現がはるかに自然な表現として容認されることが報告されている。その点を踏まえると、やはり容認面の習得と産出面の習得とでは、必ずしも同じように母語（日本語）が影響を及ぼしているわけではないことを示唆しているものと考えられる。

さらには、不定詞型の英文において、有方向移動動詞が主動詞として用いられ、移動様態動詞が不定詞として用いられているタイプ［不定詞-(a)］と、移動様態動詞が主動詞として用いられ、有方向移動動詞が不定詞として用いられているタイプ［不定詞-(b)］の双方が産出された点に着目しよう。前者（例 Ken went to field to run.）は、「走りに行った」のように不定詞部分を副詞的用法として捉えることができるが、その場合は移動の様態を示していることにはならない。後者（例 Mike swam to come into the cave. ）は、途中の不定詞の部分 “to come” を除けば「様態＋着点句」型の自然な英文になるにもかかわらず、わざわざ有方向移動動詞を補っている点は、有方向移動動詞が必要であるという母語（日本語）の影響を受けていると言えるであろう。いずれの場合も、イラストが示した着点句読みの解釈を描写する英文としては自然な表現であるとは言えない。そういう意味では、不定詞という文法項目を学習することに加え、様態を主動詞で表現しやすいという英語の特性に何らかの形で精通させていくことが、より自然な英語表現を産出できるようになることを目指す上で望ましいように思われる。これは不定詞型に限ったことではなく、and 型、by 型、分詞型など、C タイプの英文を産出した学習者にも同様のことが言えるであろう。また、容認面の習得研究で JLE が C-(1) タイプの英文を過剰に容認してしまうという報告がなされている点を改善する上でも、望ましいことであると言えるかも知れない。

上述のとおり、これら C タイプの英文はそれほど多く産出されたわけではない。しかしながら、実験参加者が (Y)［英単語・英語表現が思いつかない］と回答した場合に、どのような語や表現を思いつくことができなかったのかについて確認すると、移動様態動詞と有方向移動動詞の双方を用いて英文を産出しようとしたことが見て取れる。実験参加者が、(Y) と回答したものは全部で 209 個あった。その内、動詞を含む表現を思いつかなかったという回答が 157 個あった。この 157 個を 100%とし、これらの回答を動詞のタイプ別に分類すると、様態動詞が思いつかなかったとするものが 20

(12.7%)、有方向移動動詞が思いつかなかったとするものが 84 (53.5%)、複合動詞が思いつかなかったとするものが 53 (33.8%) であった。この内訳を図 7 に示す。なお、図内では上記の順に A’［様態動詞］、B’［有方向移動動詞］、C’［複合動詞］と示している。この内、実験参加者が産出できなかった B’［有方向移動動詞］と C’［複合動詞］における具体的な表現を表 3 に示す。

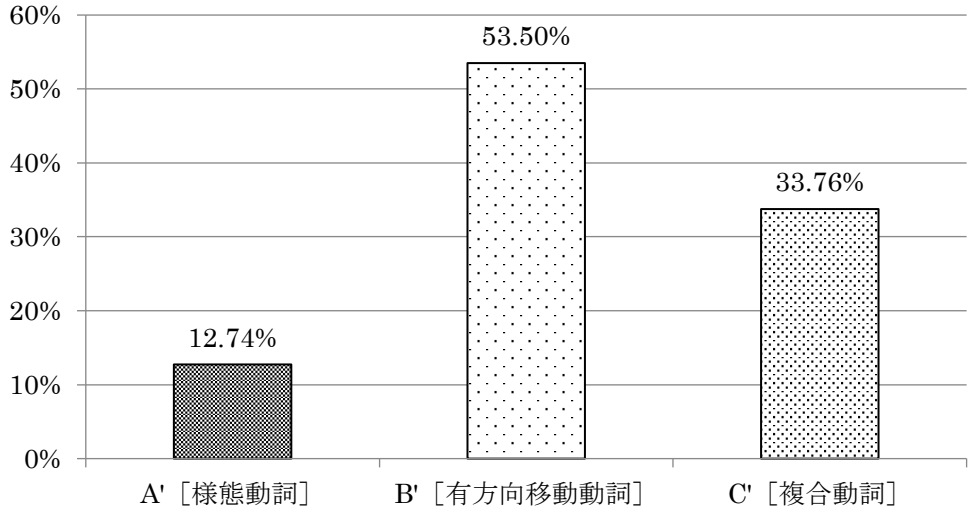

図 7　産出できなかった動詞のタイプ

表 3　産出できなかった動詞の具体例（B’・C’タイプ）

B’［有方向移動動詞］	C’［複合動詞］
上がる、昇る、入る、乗る、近づく、 離れる、出る、通過する	通り過ぎる、通り抜ける、飛びこむ、 飛び乗る、突っ込む

B’タイプと C’タイプを合わせる 88.3%と大部分を占めることが分かる。ここから、(Y) と回答した参加者で動詞の産出ができなかった者の多くが、様態動詞ではなく、有方向移動動詞や複合動詞に相当する英語表現を用いようとしていたことが分かる。複合動詞も後半の動詞（通り過ぎるの「過ぎる」、飛び乗るの「乗る」）が有方向動詞に相当し、複合動詞全体としては有方向動詞に相当するものであると言える。ここで再度、本研究の実験では実験参加者に「どのように」移動しているかを表現するように求めていたことを思い出されたい。それにもかかわらず、B’タイプの 84 回答の内、半数の 42 回答は、様態を含めずに有方向移動動詞のみを用いて産出しようとしていたことがうかがえた。また、残り半数の 42 回答は、様態を何らかの形で表現しつつ有方向移動動詞をも用いて産出しようとしていたことがうかがえた。その具体例を見ていくと、以下のように、様態を主動詞以外（不定詞）の部分で表現しつつ、明らかに主動詞の部分に有方向移動動詞を用いて産出しようとしていることが確認できた。

(7)　a. John _____ on the bed to jump.　［のった］
　　b. Tim _____ under the bridge to swim.　［通過する］
　　c. Bob _____ on the stage to walk.　［上がった］

このように、英語移動表現の産出に困難を要した学習者の中には、有方向移動動詞を（主動詞として）用いなければいけないと考えてしまっているように思われる事例が確認できた。ただし、図 6 に示したとおり、全体としては、様態動詞を用いて産出した参加者が大半を占めていた。よって、こうした母語の影響は、様態を主動詞で表現しやすいという英語の特性に精通すれば、極めて小さなものになると言えるのかもしれない。

4. 結論とまとめ

ここまでの議論から、本研究の研究課題に対する解答は次のようにまとめられる。日本語を母語とする英語学習者は、「様態」を含めて英語の移動表現を産出する場合、「移動様態動詞」を主動詞として用いて表現しやすい。また、母語の影響という点において、容認面での研究結果との類似性はみられない。ただし、様態を主動詞（移動様態動詞）のみで表現しやすいという英語の特性に精通するまでの段階では、有方向移動動詞を用いることが必要であると感じてしまう傾向があることが確認できた。

本稿は、移動の「様態」に焦点を当てて JLE による英語移動表現の習得について議論してきた。今回の検証結果やこれまでの習得研究の結果から、様態を主動詞で表す英語表現に対して、産出面においても容認面においても JLE による習得がスムーズに進むことが確認できた。ここで、移動事象の中心的概念は移動の「経路」であったことを思い出されたい。JLE にとって、英語が「様態」を主動詞で表現しやすいという特性を持つという点だけでなく、「経路」表現のバリエーションを豊富に持つという点にも精通していくことが望まれると言えるかも知れない。以下、筆者自身の経験したエピソードと合わせてこの点について述べていく。

筆者が当時担当していた授業（学生は本研究の実験参加者）において、以下の (8) に示す英文（Grove I English Communication I, 文英堂, p.62 [LESSON 6 Eric Carle: How He Creates His Art (Part 1)]）を取り扱った際、下線部分の英文を「理解するのに苦労した」あるいは「意味がはっきりとは分からない」という意見が一部の学生から出された。このような意見は、英語に苦手意識を持っている学生ばかりからではなく、比較的英語が得意である学生や比較的良い成績を収めている学生からも寄せられた。

(8) Why do you use small creatures in your books most of the time?

When I was a small boy, (A)<u>my father would take me on walks **across** meadows and **through** woods</u>. He would lift a stone or peel back the bark of a tree and show me the living things that scurried about. He'd tell me about the life cycles of this or that small creature and then (B)<u>he would carefully put the little creature back **into** its home</u>. I think in my books I honor my father by writing about small living things. And in a way I recapture those happy times.

（Grove I English Communication I, 文英堂, p. 62 [下線・太字・(A) (B) 加筆筆者]）

この英文（Part 1）を取り扱い終える際に、学生に (9) に示す訳出例を提示した。その上で、上記のような意見を出した学生に、再度感想や意見を聞いた。そうしたところ、「（日本語）訳を見れば、ああ、なるほどそういう意味なのか、と納得できるけど、自分では気づけそうにない」といった意見や「何となくこんな意味なのだろうな、と思えていたけれど、自分ではこういう日本語には訳せそうにない」というような反応が見られた。

(9)　なぜあなたはたいていの場合，あなたの本に小さな生き物を用いるのですか.
　私が小さかったころ，(A)父はよく草地を**渡って**森を**抜けて**，散策に私を連れて行ってくれました．父は小石を持ち上げたり，木の皮をはがしたりして，あわてて走り回る生き物を私に見せてくれたものです．父は私にあれこれの小さな生き物のライフサイクルについて話し，それから(B)注意深くその小さな生き物をすみかに**戻して**あげるのでした．小さな生き物について書くことで，本の中で私は父に敬意を表わしていると考えています．そしてある意味で，私はあの幸せだった時代を呼び起こしているのです.

そのような反応を受け、筆者は以下の (10) のような日本語の複合動詞（V1-V2 Compounds）とそれに対応する英文を提示しながら、V1 に相当するものが英語では主動詞であるのに対し、V2 に相当するものが英語では動詞ではなく前置詞であったり、相当する表現がなかったりする場合があることを説明した。その説明と合わせて、教科書の本文 (8) と訳出例 (9) を再度比較しながら確認したところどの学生も納得してくれた。

(10)　a. 彼女は部屋の中から走り**出た**。
　She ran **out of** the room.　（上野・影山, 2001, p.40［下線・太字筆者］）
　b. 彼女はテーブルの上に飛び**乗った**。
　She jumped **on(to)** the table.　（上野・影山, 2001, p.43［下線・太字筆者］）
　c. 彼女のスカーフが椅子から滑り**落ちた**。
　Her scarf slid from the chair.　（上野・影山, 2001, p.62［下線・太字筆者］）

もちろん、この 1 回の指導だけでこれらの学生が「様態」や「経路」を含む表現に今後戸惑うことがなくなるというわけでは決してないだろう。しかし、こうした複合動詞を用いて、複合動詞の V1 に相当するものが英語では主動詞で表現されやすく、V2 に相当するものが英語では動詞以外の要素で表現されやすいことに精通していくことで、英語の様々な「経路」表現に精通していくことが期待できるかもしれない。移動表現は比較的学習段階の早い時期から取り扱われる英語表現であるため、こうした指導は、比較的学習段階の早い時期からでも取り入れることが可能なものであると考える。さらには、このような指導は、移動表現だけでなく、(11) に示すような様々な英語表現を身につけていく上でも効果的であると言えるかも知れない。

(11)　a. She pushed the window **open**.　「押し**開ける**」　［手段］
　b. He burned **to death**.　「焼け**死ぬ**」　［原因］
　c. He stormed **into** the house.　「怒鳴り**込む**」　［様態］
　d. He used **up** his energy.　「使い**果たす**」　［補文関係］
　（影山，1999，p.197 より抜粋［下線・太字筆者］）

冒頭でも触れたとおり、JLE が英語学習を進める上で、日英語間の語順や修飾関係の違いに配慮することは避けては通れない。本稿で指摘した日英語間の特性の差異は、語順や修飾関係の違いに配慮するだけでは学習者が気づきを得られにくいものであるかもしれない。指導要領には、「英語の特質を理解させるために、関連ある文法事項はまとめて整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫

すること」との記載がある。その実現を試みる上で、日本語の複合動詞が一定の役割を果たすことは十分に期待できると思われる。今後、より効果的にそれを実現するための具体的な指導法が検証されることが望まれる。また同様に、文法的な規則に配慮するだけでは気づきが得られにくい日英語間の特性の違いを、さらに多くの観点から明確にし、そうした特性の違いを効果的に指導や学習に取り入れる提案がなされることにも期待したい。

注釈

* 本稿は、広島大学英語教育学会（2018 年 12 月 9 日、広島大学）にて口頭発表した「日本人英語学習者が産出する英語移動表現の特徴と産出に困難を感じる表現上の特性」に加筆・修正を施したものである。発表に際して、運営委員の皆様には献身的な補助や支援をしていただいた。オーディエンスの方からは鋭い指摘や異なる観点からのご意見をいただいた。また、匿名の査読者の方々には有益なコメントや助言をしていただいた。ここに記して、感謝申し上げたい。本稿における不備・誤りは全て筆者自身の責任である。なお、本稿は JSPS 科研費 19K13284 の助成を受けた研究成果の一部である。

1. 柳瀬 (2012) では、「語られる文法」の下位区分に分類されるものとして、伝統文法、科学文法、学習文法の 3 種類について、それぞれの定義をおこなっている。
2. Talmy (2000) では、「移動事象」を、それまで付随的に言及されてきた「状態変化」事象ならびに、さらに 3 つの事象（時間形、行為相関、行為の実現）と関連付けることにより、これら 5 種類の事象を「マクロ事象」という用語を導入してまとめ、より高次な一般化を図っている。
3. 本稿では英語の着点句を to、into、onto を主要部とする前置詞句として議論を進める。
4. 着点を表す表現として、日本語では「～まで」を用いることで、到着までを含意する表現として容認されそうに思える。しかしながら、上野・影山 (2001) では、日本語の「～まで」句は、非有界的な時間句と共起できることから、英語の to のような純粋に到達を表す前置詞句と同等に扱うことはできないと述べられている。

   (i) John ran to the railroad station { *for / in } 30 minutes.

   ジョンは駅まで{30 分間 / 30 分で}　走った。　(Yoneyama, 1986)

   同様の理由から、「～へと」や「～へ向けて」という表現も着点句としては取り扱わない。本論文では、英語の着点句に相当する日本語表現を「～に」とみなして議論を進める。

   なお、影山・由本 (1997) は、「～まで」は着点ではなく、移動の及ぶ到達範囲であると述べている。同様の指摘が三宅 (2007) でもなされており、「～まで」は「範囲の終点」であり、「移動の着点」ではないと述べられている。三宅 (2007) では、以下 (ii) ~ (v) の例を示しながら、「移動の着点」＝「移動の結果、到着する場所」は、「範囲の終点」＝「移動という行為が終わる場所」は似ているようで違うとしている。

   (ii) 東京まで新幹線で行き、東京から札幌までは飛行機で行った。

   (iii) 私は東京と大阪に／*まで行った。

   (iv) 駅｛まで／*に｝歩く　／　向こう岸｛まで／*に｝泳ぐ

   (v) *次郎は東京まで着いた。

   まず、(ii) は、「～まで」がそれぞれの方法による移動が終わる終点を示すだけで、「着点」ではないことを示している。(iii) は、複数の異なった移動の行程がある場合、それぞれが「着点」ということになるので「～まで」が使えないことを示している。また、(iv) のように、移動様態

動詞は「着点」を取ることができないが、「～まで」なら取れることを示している。最後に、(v)は、「～まで」が、着点のみに焦点を当てそこに至る移動の過程を問題にしないような動詞と用いることができないことを示している。また、これとは別に、Tsujimura (1994) は、「～まで」を「～へ、に」とは異なり、二次述語として分析する提案をしている。

5. Inagaki (2001) は、これら 42 名の JLE だけでなく、英語母語話者 22 名も対象に実験を実施している。また、英語の移動表現に対する容認度を測るだけでなく、それに相当する日本語の移動表現に対する容認度も測り、双方向的な母語の影響を検証している。
6. 「様態＋場所句」型の移動表現とは、John swam inside the cave. のような表現である。この型の英文は、「着点読み」の解釈と「場所読み」の解釈の双方を持つ。Inagaki (2002) において、JLE がどちらの解釈を認めやすいかということが検証されており、「着点読み」の解釈よりも「場所読み」の解釈を容認しやすいことが報告されている。ただし、その検証実験は、Inagaki (2001) とは異なるものであった。平野 (2017) の実験では、統一された手法で「様態＋着点句」型、迂言的表現、「様態＋場所句」型の移動表現それぞれに対する JLE の容認度を検証した。その結果、JLE による「様態＋着点句」型と「様態＋場所句」型の移動表現に対する容認度の程度差は Inagaki (2002) が報告しているほど大きなものではなく、JLE が「着点読み」の解釈をある程度認めることができるということが報告されている。詳しくは、Inagaki (2002)、平野 (2017) を参照されたい。
7. 産出された様態動詞の中には、綴り字や活用変化に誤りがあるものも見られた。例えば、walk を work としたり、flew を flied したりするなどの誤りが見られた。こうした綴り字や活用変化に誤りがあるものも「様態」を主動詞（様態動詞）で産出しようとしたものとして取り扱った。
8. 表 1 の B 内の backed は、動詞として用いた場合、イラストが表す状況を表す表現としては意味が異なってしまうが、本稿では日本語の「戻る」に相当するものとして回答者が考えたものとして捉え、少なくとも「様態」を表したものではないと判断し、このタイプに分類した。
9. ある特定の参加者が、表 1・表 2 に示したタイプの例文の内、どれか 1 つのタイプばかりを産出するというようなことはなかった。しかしながら、個々人のデータや各イラストごとのデータを分析することによって、主体的把握とコード化の現れについて何かしらの傾向が確認できるかもしれない。この点については今後の課題としたい。
10. 査読者から、表 2 において、C-(1) には “Mike **entered** the cave by <u>swim</u>.” という英文があり、C-(2) には “Mike **went** to cave to <u>swim</u> in the sea.” という英文があり、これら 2 つの英文が表す意味が大きく異なることから、実験に用いられたイラストについて実験参加者全員が同じ意味理解をしているわけではない可能性があるのではないかという指摘をいただいた。これら 2 つの英文は、本文中の図 4 のイラストに対して産出された英文である。確かに、このイラストに対して “Mike went to cave to swim in the sea.” という英文を産出した参加者が、「海で泳ぐために洞窟に行った。」という意味でこの英文を産出した可能性がないとは言い切れない。しかしながら、この実験では、英文を回答するにあたり、イラストの人・物が「どこへ」「どのように」移動しているか、あるいは、「どこで」「どのような」行為をしているかを表現するように努めてもらったことから、その可能性は低いように思われる。むしろ、参加者が不定詞を正しく使用できていないことの現れでもあると思われる。これは、“The bird **came** to <u>fly</u> near the house.” という英文が産出されていることからもうかがえる。ただし、査読者の指摘のとおり、今回の実験に用いたイラストの中に、参加者全員が同一の意味理解をしていたわけではないものが含ま

れる可能性は否定できない。この点を補うことは今後の課題としたい。

参考文献

出水孝典. (2012). 「Talmy の類型論を再考する」『六甲英語学研究』*15*, 25–79.

江川泰一郎. (1991).『英文法解説』 東京：金子書房.

藤田耕司・松本マスミ・児玉一宏・谷口一美 (編). (2012).『最新言語理論を英語教育に活用する』東京：開拓社.

平野洋平. (2017).「日本語を母語とする英語学習者による英語移動構文とその迂言的表現に対する容認性判断再考」『日本教科教育学会誌』*40*(2), 43–56.

平野洋平. (2018).「日本人英語学習者による英文の容認性判断に影響を及ぼすサテライトフレーム言語・動詞フレーム言語としての言語特性: 移動構文と結果構文を中心に」博士論文, 広島大学.

廣森友人. (2015).『英語学習のメカニズム－第二言語習得にもとづく効果的な勉強法』東京：大修館書店.

Inagaki, S. (2001). Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese. *Studies in Second Language Acquisition*, *23*(2), 153–170.

Inagaki, S. (2002). Japanese learners' acquisition of English manner-of-motion verbs with locational/directional PPs. *Second Language Research*, *18*(1), 3–27.

加賀信広, 大橋一人 (編). (2017).『授業力アップのための一歩進んだ英文法』東京：開拓社.

倉持三郎・川端一男・磯田祐史・加藤正紀・笹島茂・須永豊・田所メアリー・John R, H. (2017).『Grove English Communication I New Edition』東京：文英堂.

三宅知宏. (2007).『日本語と他言語－＜ことば＞のしくみを探る』横浜：神奈川新聞社.

文部科学省. (2017a).『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説－外国語活動・外国語編』東京：開隆堂.

文部科学省. (2017b).『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説－外国語編』東京：開隆堂.

文部科学省. (2018).『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説－外国語編・英語編』東京：開隆堂.

中島平三. (2017).『斜めからの学校英文法』東京：開拓社.

小野尚之. (2012).「サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語」藤田耕司・松本マスミ・児玉一宏・谷口一美 (編)『最新言語理論を英語教育に活用する』(pp. 323–335), 東京：開拓社.

大津由紀雄 (編). (2012).『学習英文法を見直したい』東京：研究社.

白畑智彦. (2015).『英語指導における効果的な誤り訂正－第二言語習得研究の見地から』東京：大修館書店.

Spring, R. (2010). A Look into the acquisition of English motion event conflation by native speakers of Chinese and Japanese. *Proceedings of the 24th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 563–572.

スプリングライアン・堀江薫. (2011).「英語のフレーム化習得に関する認知言語学的研究：中国語・日本語母語話者を対象に」野瀬昌彦 (編)『日本語と X 語の対象—言語を対照することでわかること—対照言語学若手の会シンポジウム 2010 発表論文集』(pp. 95–104), 京都：三恵社.

Spring, R., & Horie, K. (2013). How cognitive typology affects second language acquisition: A study of Japanese and Chinese learners of English. *Cognitive Linguistics*, *24*(4), 689–710.

鈴木渉 (編). (2017).『実践例で学ぶ—第二言語習得研究に基づく英語指導』東京：大修館書店.
Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
Tsujimura, N. (1994). Unaccusative mismatches and resultatives in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics 24: Formal Approaches to Japanese Linguistics*, *1*, 335–354.
上野誠司・影山太郎. (2001).「移動の経路の表現」影山太郎 (編)『日英対照 動詞の意味と構文』(pp. 40–68), 東京：大修館書店.
牛江一裕. (2002).「文を作る仕組み：統語論 I」大津由紀雄 (編)『言語研究入門 生成文法を学ぶ人のために』(pp. 102–117), 東京：研究社.
柳瀬陽介. (2012).「コミュニケーション能力と学習英文法」大津由紀雄 (編)『学習英文法を見直したい』(pp. 52–65), 東京：研究社.
Yoneyama, M. (1986). Motion verbs in conceptual semantics. *Bulletin of the Faculty Humanities*, *22*, 1–15.
米山三明. (2009).『意味論から見る英語の構造－移動と状態変化の表現を巡って－』東京：開拓社.

学会彙報：2018（平成 30）年度～2019（令和元）年度

【2018 年度】

1．第1回運営委員会記録

日　時:　　2018 年 12 月 9 日（日）12:00～13:00

場　所:　　広島大学教育学部 A212

出席者（敬称略）：深澤清治・樫葉みつ子・柳善和・山岡大基・兼重昇・西原貴之・小野章・柳瀬陽介・
　　馬本勉・本岡直子・山川健一

運営委員会議事録:

(1)　第 1 回総会の議題について検討を行った。

2．第1回研究大会・総会記録

日　時:　　2018 年 12 月 9 日（日）10:00～15:40

場　所:　　広島大学教育学部 K102, K104 号室

参加者：約 50 名

総会議事録:

(1)　深澤清治氏（広島大学）より，挨拶と（旧）広島大学英語教育学会と（旧）広島大学英語文化教育学会の学会統合にいたる経緯説明があった。

(2)　会則に基づき，運営委員を選出し，役員を選出した。この役員案は，総会において承認された。選出・承認された役員は以下の通り。

　　会長：深澤清治氏（広島大学）
　　副会長（研究志向部門）：築道和明氏（広島大学）
　　副会長（実践志向部門）：樫葉みつ子氏（広島大学）
　　研究志向部門長：　柳善和氏（名古屋学院大学）
　　実践志向部門長：　山岡大基氏（広島大学付属中高）
　　事務局長：兼重昇氏（広島大学）
　　編集委員長：川島浩勝氏（長崎外国語大学）
　　会計：　西原貴之氏（広島大学）
　　運営委員：馬本勉氏（県立広島大学）
　　運営委員：小野章氏（広島大学）
　　運営委員：本岡直子氏（県立広島大学）
　　運営委員：柳瀬陽介氏（広島大学）
　　運営委員：山川健一氏（安田女子大学）
　　会計監査：平本哲嗣氏（安田女子大学）
　　会計監査：大和知史氏（神戸大学）
　　名誉会長：三浦省五氏（広島大学名誉教授）
　　顧問：中尾佳行氏（福山大学）

(3)　広島大学英語教育学会会則及び各種規定等について，学会統合に向けた委員会で事務的な責任者を務めていた柳瀬陽介氏（広島大学）より説明された。なお，これらは 2017 年度の（旧）広島大学英語

教育学会と（旧）広島大学英語文化教育学会それぞれで承認されていたので，総会では，会則及び各種規定の確認及び変更点のみが審議された。広島大学英語教育学会会則については，学生会員の資格と終身会費の支払いについて修正を加えた。広島大学英語教育学会理論志向部門規程については，学術誌の Web 発行に関して修正を加えた。広島大学英語教育学会実践志向部門規程と広島大学英語教育学会研究奨励基金規程・大学院学生研究発表奨励金要項については修正はなかった。『英語教育学研究』投稿規程・執筆要領については，学術誌の Web 発行による大幅な改定があるので，後日役員会で協議の上改訂し公表することが確認された。

(4) 2017 年度の（旧）広島大学英語教育学会と（旧）広島大学英語文化教育学会の事業報告と会計報告がそれぞれ承認された。

(5) 2018 年度の（新）広島大学英語教育学会の予算案・同事業計画案が審議された。その中で，理論志向部門による学術誌発行形態について審議した。事務局からの A 案（印刷媒体での発行で年会費 4000 円の案）と B 案（Web 媒体での発行で年会費 2000 円の案）に加えて，会員から提案された C 案（印刷と Web の両方の媒体での発行で年会費 6000 円の案）の三案で協議し，多数決で B 案を採択した。この結果，B 案に基づいた予算案・事業計画案が承認された。

(6) 今年度（2018 年度）の理論志向部門の会費徴収は，総会開始延期のために遅れていたが，総会での決定に基づき，年会費として 2000 円の会費納入を会員に依頼することとなった。

(7) 来年度（2019 年度）の総会・大会は 7/28（日）を予定していることが周知された。

実践志向部門・座談会：

コーディネーター：樫葉 みつ子（広島大学准教授）

「（入職直後の）初任者教員の苦労と展望を語り合う」

登壇者：壬生川 奏美（広島県福山市立手城小学校教諭）
高橋 怜奈（広島県三原市立第二中学校教諭）
重定 拓実（岡山県立倉敷工業高等学校教諭）
手島 英華（広島県立尾道東高等学校教諭）

理論志向部門・研究発表：

司会：築道 和明（広島大学教授）

研究発表 1：「日本人英語学習者の不平発話行為運用に対する英語母語話者による適切性判断の分析」

梅木 璃子（広島大学大学院生博士課程後期）

研究発表 2：「日本人英語学習者が産出する英語移動表現に見られる特徴と産出を難しくさせる要因」

平野 洋平（神戸市立工業高等専門学校准教授）

小論文コンテスト授賞式：

最優秀賞「我々を映し出す試験という鏡」清水一生氏

対話の集い：

英語テストのあり方（グループでの対話と全体での対話）

情報交換会（ワンコインパーティ）：

【2019 年度】

1．第1回運営委員会記録

日 時： 2019 年 7 月 28 日（日）11:30～13:00

場　所:　　広島大学教育学部 A212
出席者(敬称略):深澤清治・築道和明・樫葉みつ子・柳善和・山岡大基・兼重昇・川島浩勝・西原貴之・小野章・柳瀬陽介・馬本勉・本岡直子・山川健一・三浦省五・中尾佳行
運営委員会議事録:
(1)　第 2 回総会の議題について検討を行った。

2. 第1回研究大会・総会記録

日　時:　　2019 年 7 月 28 日(日)10:20～15:10
場　所:　　広島大学教育学部 L102, K102 号室
参加者:約 30 名
理論志向部門・研究発表:

司会: 築道　和明(広島大学教授)

研究発表 1:「経験ある英語教師の教科書使用に影響を与える要因」

山路　理恵(宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校教諭)

研究発表 2:「A Case Study on the Zone of Proximal Development: Scaffolding Role-Playing in Primary School English Language Teaching in Japan」

Stella Anggrainy(広島大学大学院生博士課程前期)

総会議事録:
(1)　議長として会員の中住幸治氏(香川大学)が選出された。
(2)　役員の変更案が審議され, 承認された。これにより, 事務局長が兼重昇氏(大阪樟蔭女子大学)から西原貴之氏(広島大学)に変更となり, 新たに山川健一氏(安田女子大学)が編集事務局長, 柳瀬陽介氏(京都大学)が編集委員に就任することとなった。

会長: 深澤清治氏(広島大学)
副会長(研究志向部門): 築道和明氏(広島大学)
副会長(実践志向部門): 樫葉みつ子氏(広島大学)
研究志向部門長: 柳善和氏(名古屋学院大学)
実践志向部門長: 山岡大基氏(広島大学付属中高)
事務局長: 西原貴之氏(広島大学)
編集委員長: 川島浩勝氏(長崎外国語大学)
編集事務局長: 山川健一氏(安田女子大学)
編集委員: 柳瀬陽介氏(京都大学)
会計: 西原貴之氏(広島大学)
運営委員: 馬本勉氏(県立広島大学)
運営委員: 小野章氏(広島大学)
運営委員: 本岡直子氏(県立広島大学)
運営委員: 兼重昇氏(大阪樟蔭女子大学)
会計監査: 平本哲嗣氏(安田女子大学)
会計監査: 大和知史氏(神戸大学)
名誉会長: 三浦省五氏(広島大学名誉教授)
顧問: 中尾佳行氏(福山大学)

(3) 編集委員会規定案，査読委員会規定案，投稿規定，投稿要領，投稿チェックシート案が承認された。
(4) 学会誌の表紙は（旧）広島大学英語教育学会で発行されていた『英語教育学研究』の表紙を継続して使用し，号数も続けて第 10 号とする案が承認された。
(5) 査読委員への負担と編集委員会のスムーズな運営のために，査読謝金を 1 人論文 1 本につき，謝金として 5,000 円を支払うことが決定された。なお，学術誌をウェブ刊行することによって，財源に余裕が生まれており，査読謝金の増額で学会予算を圧迫することはないことも確認された。
(6) 学会誌をウェブ刊行することで財源に余裕が生まれたことに伴って，実践志向部門会費を 3,000 円から 2,000 円に減額することが了承された。また，このことに伴って，会則の微修正が行われ，承認された。（広島大学英語教育学会会則第 6 条の 2 の改正）。
(7) これまで予算から毎年 100,000 円を研究奨励金としてプールしていた。しかしながら，2016 年度を最後に研究奨励金の使用実績がなく，2018 年度末の時点で研究奨励金のプール金が 1,476,935 円にまで膨らんでいる。そこで，しばらく予算から研究奨励金のプール金を拠出することを休止することが事務局より提案され，了承された。
(8) 2018 年度の事業報告と同会計報告がそれぞれ承認された。
(9) 2019 年度の予算案・同事業計画案が審議され，それぞれ承認された。
(10) 来年度の大会日程については，東京五輪が開催され，スケジュールについて現状で見通しが立たないため，2020 年度総会・大会については後日決定することとなった。

実践志向部門・ワークショップ（一般公開）：
参加者：約 120 名

司会：樫葉 みつ子（広島大学准教授）

「英語スピーキングワークショップ：「交渉」までつながる「やり取り」」

講師：千菊 基司（広島大学附属福山中・高等学校）

広島大学英語教育学会の統合の経緯について

広島大学英語教育学会
会長　　深澤清治

このたび、新しい研究・同窓組織として広島大学英語教育学会が設立され、『英語教育学研究』第 10 号の刊行をもって研究組織として再出発をすることになった。時を同じくして、本年 4 月からは広島大学の研究科改組により、長年親しんだ広島大学大学院教育学研究科という名称がなくなり、大学院人間社会科学研究科の中で教育科学専攻として教育・研究活動を続けることとなった。ここに、研究組織の再出発に合わせて諸規則などが整備されたことを受けて、学部統合の前後からこれまでに至る本学会の経緯をまとめておきたい。

教育研究と教員養成において長い伝統と実績をもつ広島大学において、旧・広島大学教育学部（1949 年の広島大学設置とともに誕生）と広島大学学校教育学部（1978 年設置）が東広島キャンパス移転後の 2000 年に統合し新・広島大学教育学部が誕生したことに合わせて、それぞれの研究・同窓組織である広島大学英語教育学会と広島大学学校教育学部東雲英語研究会の２つの学会は、両学会の代表者によって会議を重ね、新名称「広島大学英語文化教育学会」のもとで統合することになった。それを受けて、2007 年夏に設立総会を開催したが合意が得られず、設立が延期された。

その後、広島大学英語文化教育学会に移行する過程で、2007 年 10 月 13 日に大学院修了生を中心とする有志が「広島大学英語教育学会」（第 3 期と呼ぶ）という新組織を設立し（会長・三浦省五、事務局：杉野直樹）、独自に会費を徴収し、研究誌『英語教育学研究』を発刊することになった。

そして翌 2008 年 8 月 23 日（土）に「広島大学英語文化教育学会」（会長・深澤清治、事務局長・兼重昇）として第 1 回総会・研究会が開催され、以後、毎年ニュースレターが発行された（編集・小野章）。

しばらくの間、両学会は別組織として活動しつつも、毎年の例会を 7 月末の土日に連続して開催してきた。そのうちに、別組織として活動することに次のようないくつかの課題が浮かび上がってきた。

1. 広島大学英語教育学会（第 3 期）は設立当時の大学院修了生のみで構成されており、学会設立後、新たに修了した大学院生との交流の機会が失われた。学部卒業生との交流の機会が失われたことにより、新たに大学院に進学した博士前期課程・後期課程の院生とこれまでの大学院修了生とのつながりも失われがちになり、従来の広島大学教英の強みであった結束力も弱体化する恐れがあった。

2. 広島大学英語文化教育学会は、学部生および学部卒業学生を中心とした組織であったため、研究面でやや弱体化する傾向がみられた。

3. 学会組織としてより大きな集団であることにはスケールメリットがあると考えられる。２つの別組織となった場合、同窓・研究組織としての学会の求心力が弱体化する可能性がある。現在のように英語教育学・応用言語学の研究組織が全国各地に存立している中で、組織として確固とした

基盤を築くためには学部・大学院の双方の出身者が同一の組織で研究・実践の成果を集約できる学会を改めて組織する必要がある。

4. 広島大学英語教育学会（第 3 期）においては、事務局、理事会メンバーはそれぞれの所属校、大学において重要なポストについており、学会活動を牽引していく時間的余裕が取れなくなっている。

5. 時代が進むにつれて、小中高の教員に採用される場合でも、大学院出身者が増え、従来のように、大学院を修了すること（特に博士前期課程の場合）と大学で職を得ることが必ずしも結びつかなくなってきたこと、また、小中高の教員を経験して博士前期課程・後期課程に進学することが増えてきたことを考慮すると、「研究」と「実践」を分けてそれぞれで活躍するというよりは、両者を融合させて組織を活性化した方が、学会としてより魅力のある活動ができるのではないか、またその方が実際的であると考えられるようになった。

以上を主な理由として、いったん離れた２つの組織をもう一度統合しようとする動きが生まれた。2017 年にそれぞれの学会の代表者数名が会合し、新たな組織として「広島大学英語教育学会」を再設立し、その中に理論研究部門と実践研究部門をおいて、理論、実践の両面から英語教育の推進に向けた研究集団になるべく、統合の準備作業が行われた。当初、第 1 回の広島大学英語教育学会（第 4 期）の設立総会・研究会を 2018 年 7 月 22 日（日）に予定していたが、その年の平成 30 年 7 月豪雨によって東広島市も甚大な被害を受けたため開催は延期され、同年 12 月 9 日（日）に第 1 回総会・研究大会が開催された。そして昨年度は 2019 年 7 月 28 日（日）に第 2 回の総会・研究会が開催された。

以上のように、過去 20 年間にいくつかの動きがあったが、最終的に広島大学教育学部が東千田町にあった頃に設立された広島大学英語教育学会からは第 4 期目にあたる同名の組織となった。教育研究の方向や会員の動向に変化はあるが、本学会にとって英語教育研究は不易の目的かつ使命であり、学会活動が今後さらに発展、向上することを祈念している。

編　集　後　記

本日ここに、『英語教育学研究』第 10 号をお届けいたします。

平素より『英語教育学研究』の刊行につきまして、会員の皆様の御支援・御協力を賜り、篤くお礼を申し上げます。

２年前の平成 30 年には西日本豪雨に見舞われ、また、今年、令和２年には新型コロナウイルスが蔓延し、多くの方が苦しみ、多難な時代を迎えております。そのような中にあって『英語教育学研究』の刊行にこぎつけることができたことを嬉しく思っております。

『英語教育学研究』を取り巻く環境には厳しいものがありますが、本第 10 号では、研究論文一本を掲載しております。英語教育学における核心的テーマが深く追求され、存在感十分で、その論考には輝きがございます。英語教育学の発展に大きく寄与する玉露となっております。ご執筆いただいた先生に感謝を申し上げます。

本年度より、『英語教育学研究』は紙媒体を卒業し、ウェブ上で再デビューすることになりました。記念すべきウェブ版第１号となるわけですが、英語教育学における研究成果を同志と共同化するという本学会の崇高な目的を胸に刻みながら、新しい時代を見据えた学術雑誌に成長していくことを期待して止みません。

本学術誌への投稿は、夏の年次研究大会で発表されたものだけに限定されているわけではございません。長年あたためてこられた研究成果など幅広くご投稿を歓迎しております。次号に対しても会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

『英語教育学研究』丸には空席に余裕がございます。しばしば、「ピンチの後のチャンス」などと言われますが、状況が厳しければ厳しい程、大きなチャンスが巡ってくると思います。諸先生方のオールをお借りし、大海原へ船出できる日が来ることを願っております。会員の皆様の益々のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

編集委員長　川 島 浩 勝

英　語　教　育　学　研　究　　第10号

発行日　2020（令和2）年　6月12日

発行所　広島大学英語教育学会
学会事務局
〒739-0046　広島県東広島市鏡山１－１－１
広島大学大学院人間社会科学研究科
英語教育学講座　西原貴之研究室